



| | |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title | リクールにおける無意識概念の検討：フロイトの〈力〉と〈意味〉の混合言語の分析 |
| Author(s) | 池田, 清 |
| Citation | 待兼山論叢. 哲学篇. 1985, 18, p. 1-16 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/12858 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

リクールにおける無意識概念の検討

——フロイトの〈力〉と〈意味〉の混合言語の分析——

池 田 清

はじめに

フロイトの精神分析理論（特にメタ心理学）は、局所論的経済論的 *topique-économique* 観点から実体論的とも評される自然主義的的局面と、『夢解釈』の標題の示す通り、分析経験における夢の物語的告白や神経症の症候についての解釈に基づく解釈学的局面とをもつ。力関係を扱うエネルギー論的局面と意味関係を扱う解釈学的現象学的局面、フロイトの理論にこの両局面を〈力の言説 *discours de la force*〉と〈意味の言説 *discours du sens*〉として見出し、アポリアとも言えるこの混合構造をその理論の存在理由と捉え、その構造を認識論的検討にかけることで〈力〉と〈意味〉の構造を照らし出すこと、これが、『フロイト論』等の一連の精神分析関係の論文におけるリクールの試みである。リクール哲学における精神分析の位置は二重である。リクールは方法的に意味論的平面での言語分析から、主体理論としての反省論的平面を介して実存論的段階での存在論へ向おうと画策するのであるが、⁽¹⁾

精神分析は、意識・自我批判である限りで反省論的平面に属し、また〈意味〉と〈力〉の構造解明のひとつの働きを与える限りで、⁽²⁾実存論的段階に属し、この後者の段階で〈主体の始源論 *archéologie du sujet*〉として規定されるのである。意識・自我批判としての精神分析からリクールが読み取る主体概念の変革は、デカルト的コギトに対する傷ついたコギト *Cogito blessé* の設立にある。精神分析が一つの局所論において、幻想化としての〈意識的であること〉を脱幻想化としての〈意識的になること〉に、支配された〈自我であること〉を支配する〈自我になること〉に、すなわち起源としての〈主体であること *être-sujet*〉を課題としての〈主体になること *devenir-sujet*〉(C.I., 237) に変える必要性を教示する限りで、リクールは、反省の措定と意識の主張を同一視する理論つまり〈反省の必然性―意識の明証性〉の図式を解体し、意識の不十全性を宿すコギトつまり自己を措定するが自己を所有しないコギトを設立するのである。

ところで意識・自我批判としての消極的なこの精神分析と〈主体の始源論〉としての積極的な精神分析(D.I., 426, C.I., 239)の結合は、その表裏一体性によって、主体概念と精神分析理論の存立構造を巡って次のような二者択一を迫る危険を誘発する。一方で意識・自我批判の精神分析において、主体概念の変革の流れを導くのが局所論的経済論的観点から成るエネルギー論であるとすれば、その流れは *sujet* 〈根底に―あるもの〉を無意識的衝動に定位し、衝動一元論、無意識の素朴実在論へと通じる。他方で精神分析理論とは、四要素(言語性、相互主観性、心の現実性、物語性)によって特徴づけられる分析状況に分析者が標柱を打つ意味関係の成文化であり⁽³⁾そしてその関係を設立しかつ成文化する主体が解釈学的意識であるとすれば、この流れはその理論のみならず、その理論の主題たる無意識的衝動までもその意識の構築物とみなし、自己自身に透明な意識たる超越論的主観性を中心とする衝動

の観念論へと通じる。しかし主体概念に〈力〉と〈意味〉の二者択一を迫ることで成立するこの対立構造を、フロイトの理論の〈力の言説〉と〈意味の言説〉の混合構造を検討しつつ、〈力〉と〈意味〉の相補的構造として捉え直すことによって、〈主体の始源論〉へ道を開くこと、これがリクールの意図である。それ故、主体概念を〈力〉の側に置く前者の流れに対しては、精神分析は主体としての意識・自我を更迭するが、意識・自我一般を排除しはせず、それに自己解釈の必要性を課することで解釈学的意識として回復するのであり、従って「脱中心化の第一の課題は解釈における意味の再把握という第二の課題から分離されえず」(D.I., 411)最終的には「無意識の实在は絶対的实在ではなく、それに意味を与える操作と相対的である」(D.I., 423)と言わねばならない。主体概念を〈意味〉の側に置く後者の流れに対しては、力関係を扱う分析作業としての〈治療方法〉が、意味関係を設立する解釈としての〈探究手続き〉を自己の知的部分として内包し、また〈理論〉が両者の統合を目論む(D.P.: 392)にすぎない限りで、精神分析は終始「抵抗に対する戦い」(D.I., 396)としての実践であると反論せねばならない。〈主体の始源論〉への道程を図式化すれば、フロイト理論の〈力の言説〉と〈意味の言説〉の関係構造の分析を通して、リクールはエネルギー論的局面から結果する無意識的衝動の素朴实在論に対しては、その衝動と解釈学的意識の相対性を、解釈学的局面から結果する解釈学的意識を中心とする観念論に対しては、その意識への無意識的衝動の還元不可能性を論じるのである。拙論はリクールの精神分析関係の諸論文を参照しつつ、大著『フロイト論』に沿ってこの道程を跡づけることを目的とする。

無意識的衝動の素朴实在論に対してその衝動の解釈学的意識への相対性を確認する行程は簡略化すれば、直接意識の放棄→意識性 *le conscientiel* の回復→解釈学的意識の顕示、である。それはフロイト読解——その著作の建築

学的再構成 (C.I., 160) —— の地平での二つのコース、(一)フロイトにおける局所論的經濟論的觀點と衝動概念の獲得による直接意識の放棄のコース (本論第一章)、(二)フロイトにおける〈衝動の心的代表 presentation psychique de la pulsion〉概念による意識性の回復のコース (本論第二章) を経、次に「客観性と知解可能性の新しい領域を秩序づけるその能力によって實在論的概念を正当化する」(D.I., 419) カント的認識論の地平での解釈学的意識を中心としたフロイト読解の捉え直し (本論第三章) へと至る。しかしこの捉え直しから結果する無意識的衝動の觀念論に対して解釈学的意識へのその衝動の還元不可能性を論じる行程は、再びフロイトの読解の地平に回歸しその經濟論の究極的意味を問い、〈主体の始源論〉へと道を開くのである (本論第四章)。

一 直接意識の放棄のコース

このコースはフロイトにおける局所論的經濟論的觀點と衝動概念の獲得から始まる。局所論的觀點は、無意識概念を意識に対する潜在状態としての〈無意識的〉表象として規定する記述的觀點に端を発し、「意識の接近を阻む諸力によって意識から排除された (諸思想)」(D.I., 123) としてその概念を捉える力動的觀點を媒介として成立する。つまり表象が「意識的になることは二つの様態をもつ。それが可能で容易である場合は単に前意識と言われ、それが禁止され〈切断される〉場合は無意識と言われる。こうして我々は三つの審級、無意識 Ics、前意識 Pcs、意識 Cs、をもつ。…〈体系への帰属性〉は無意識をそれだけで措定することを可能にする」(D.I., 123-124)。經濟論的觀點がこの局所論を現実化する。それは仮説的基礎概念として衝動を定立し、それを二分する補助仮説として性衝動と保存衝動とを臨床に基づいて区分し、一般仮説として快感原則とその機能成就にまわり道を開く現実原則

を定立し、さらに多数の仮説を定立することで快 \parallel 目標の達成過程を量的に把握する。対象概念よりも快 \parallel 目標概念を優先するこの経済論的観点は「何ものかを愛することと自己を愛することとの原初的融合」(D.I., 129)としてのナルシスムによって裏打ちされる。ナルシスムの第一段階とは外界が関心の対象とならず、自我・主体だけが快の源泉である自体愛の段階である。この段階は、自我・主体が、保存衝動によって提出された対象をそれが快の源泉となる限りで自己の内に摂取し、また自己の内では不快の原因となるものを外に投射することで、快をもつものと不快をもつものが自我・主体と外界・対象として経済論的に分割される過程を経て、対象的段階へ移行する。このナルシスム的な経済論的分配過程の結果として成立した対象的段階において、快や不快は自我・主体の対象に対する関係を意味するようになり、その関係が快である時我々は対象に魅力を感じ、逆の時我々はその対象に反感を感じる。主体—対象関係のこの経済論的分配を主導したナルシスムは、愛する対象の喪失に対する正常な反応である喪と、自己感情の低下と激しい自己批難を伴う点でその病的な反応であるメランコリーとに共通の基本條件である。喪では、対象よりも生きのびようとする自己への愛着たるナルシスムによってリビドーの備給変化が生じ、しかもその間失われた対象が心的に存在し続ける限りで、対象へのナルシスムの同一化が基底にある。メランコリーでは、リビドーは新しい対象備給に向わず自我の中に引きこもり、自我と失われた対象を同一化する。この対象へのナルシスムの同一化によって、対象の喪失は自我の喪失となり(↓自己感情の低下)、自我と愛する対象の葛藤は自我の批判能力と、同一化によって変容した自我自身との間に存続する(↓自己批難)に至る。

このフロイト読解を地平にして、リクールは直接意識を放棄するための三契機を見い出す。第一の契機は局所論に存する。意識が「外在とのすべての関係の座」(D.I., 181)として意識 \parallel 知覚系 Cs-Pcpt にすぎない限りで、重要

なのは意識的であること être-conscient よりも、抵抗を抑えて無意識系の表象を意識系に移動させること、つまり意識的になること devenir-conscient である。第二の契機は主体—対象関係発生の経済論的分割に存する。現象学の基底にある志向性の一方の極としての自我と他方の極としての対象が、経済論的分配によって成立した対象的阶段に属するのであれば、自我は構成的働きを失い、対象も分析の導き手という資格を失う。つまり自我も対象も「衝動の目標の変数」(D.I, 413)にすぎないのである。第三の契機はナルシシスムに存する。正常な喪にも病的なメラニコリーにも共に通底する対象へのナルシシスムの同一化は「対象価値と主体価値が絶えず交換される」(ibid.) ことを意味するのであれば、自我と対象の区別は意識の判断を逃れるのである。リクールはこのナルシシスムを直接意識の放棄の極点と捉え、フロイトと共に、意識的になることに対する「ナルシシスムの抵抗」(D.I, 415)と言う。ナルシシスムは「真理への我々の極度の抵抗が帰されねばならない真の悪霊」(D.I, 414)として現われ、原初的なコギトに共外延的な偽わりのコギト le faux Cogito を成立させるのである。このようにリクールは、フロイトにおける局所論とナルシシスムに裏打ちされた衝動の経済論、つまり〈力の言説〉の中に直接意識の放棄を読み取るのである。

二 意識性の回復のコース

このコースは〈衝動の心的代表〉概念の検討から始まる。衝動は精神分析が前提する対象である限りで、心的生活の生物学的側面の捨象による〈心的なもの〉と〈身体的なもの〉との限界概念として現われ、結局それは〈心的代表〉概念と等価である。「意識的なものにおけるすべての露出物はこの心的代表、この原初的な〈相当物〉の諸置

換にすぎない」(D.I., 138)とところでリクールはフロイトに従って、この〈心的代表〉に〈表象代理 representant-representation〉と〈情動 affects〉の区別を行うが、戦略上後者をカッコに入れ、衝動を〈表象代理〉に限定して論を進める。拙論はリクールに依って、〈情動〉概念の中に解釈学的意識への無意識的衝動の還元不可能性の行程を辿ろうとするものであるから、ここでは〈表象代理〉の問題性のみを扱う。

抑圧はこの〈表象代理〉と無意識の関係を明確にする。原抑圧と本来の抑圧とに二分される抑圧は、〈衝動の表象代理〉に隔たりと歪曲という複雑性を導入する機制であるが、しかし衝動とその〈心的代表〉としての〈表象代理〉間の機制ではない。この機制は定義上あり得ない。原抑圧は〈表象代理〉が意識系に入るのを拒否されることである。原抑圧によって分離された〈表象代理〉については、それは固着の産物であり、不変のまま存続し、衝動がその〈表象代理〉に結合した状態が続いているとしか言えない。本来の抑圧とは、原抑圧によって分離された〈表象代理〉の心的派生物と、他の所で生じ、この〈表象代理〉と連合関係に入った思想連鎖とが意識系に入るのを拒否されることである。従って抑圧理論によれば無意識は、〈表象代理〉を核とした心的派生物と思想連鎖の無限の枝分れによって構成された体系である。しかしこの心的派生物等は、隔たりと歪曲を蒙りながらも症候として現われることで意識系への通路が開かれている。つまり体系間を分離する抑圧という境界線があるにもかかわらず、体系間に、意識系も無意識系も共に心的であるという構造上の共通性を認めねばならない。それ故隔たりと歪曲を導入する抑圧の機制は抑圧の結果から逆に推論して理解され得るのであり、表象や目的等の意識的過程に適用されるあらゆるカテゴリーが無意識過程の記述に適用可能なのである。ここで分析は心的派生物等を常により原初的な衝動表現と比較して、その隔たりと歪曲の度合に従って解釈する術として成立する。この時、例えば分析される心的現象の側の心的諸派

生物間の隔たりと歪曲という関係は、分析自体の側の翻訳関係の対応物であると言い得るのである。

このフロイト読解を地平にして、〈衝動の心的代表〉概念からリクールは意識性回復の二契機を読み取る。その概念は、無意識系を構成する核としての〈表象代理〉とその心的派生物や思想連鎖が、隔たりと歪曲を通して自らを偽装しながらも、意識系に露呈されること、つまり無意識系も意識系も心的であるという構造上の共通性を意味する。この共通性によって精神分析は、意識系と無意識系間の隔たりと歪曲にもかかわらず、意識レベルのカテゴリーを無意識レベルに適用し、無意識レベルの機制を意識系からの翻訳として提示し得るのである。さらに隔たり・歪曲関係と翻訳関係の対応性からすれば、〈心的代表〉概念は意識と無意識の心的という構造上の共通性を意味するばかりか、「心的なものは意識的になる可能性(それがいかに遠く困難なものであれ)なしには定義され得ない」(D.I., 471)ことを含意する。つまり無意識系の表象が正しくその系に属すと言い得るには、その表象が抵抗に抗して意識系に現われてくることが前提条件である。意識的になることは患者の解放への課題であるばかりか、精神的分析的解釈の基本課題でもあるわけである。換言すれば〈衝動の心的代表〉概念の二重の意味、心的という構造上の共通性による意識系から無意識系への翻訳可能性と、意識的になることによるその解釈の正当な区分の可能性とから、リクールはフロイトと共に、「意識性は我々のすべての研究の出発点をなす」(ibid.)と言うのである。従って「衝動の一次代表がいかに隔てられその派生物がいかに歪曲されていようと、それらはまだ意味の区画に属している。それらは原理上意識現象との関係で翻訳され得る。要するに精神分析が可能なのは意識への回帰としてであって、なぜなら或る種の仕方でも無意識は意識と等質なのであるから。無意識は意識の相対的他者であり絶対的他者ではない」(ibid.)。こうしてリクールは、精神分析的解釈の始点から終点に至るまで意識性へのその解釈の参照

関係を読み取ることで、無意識的衝動、正確にはその〈表象代理〉を核とした無意識系を翻訳によって徹頭徹尾言語化可能なものとみなし、フロイトの理論を解釈によって成立した〈意味の言説〉として提示するのである。

三 解釈学的意識の顕示

顧みれば、直接意識の放棄は局所論的経済論的観点からの〈力の言説〉設立コース上であり、意識性の回復は解釈による〈意味の言説〉設立コース上にある。無意識的衝動を無意識的表象群の核としての〈表象代理〉に限り、従って暫定的に両言説の関係構造を見定めておくことがこの章の課題である。フロイト読解の地平でも「正しく心的表現、心的代表という概念において経済論と解釈学は一致するようになる」(D.I., 145)と言われる通り、その構造は〈力の言説〉の〈意味の言説〉への混合であり帰属性であると言える。直接意識の放棄を促した対象概念を「超越論的導き手」(D.I., 412)として回復することで、この帰属性を顕在化するのが、カント的認識論を地平にした、超越論的主観性としての解釈学的意識を前面に出したフロイト読解の捉え直しである。それは、無意識の実在論を課す局所論と経済論的観点を解釈学的場に結びつけ直すことで、その実在論的概念を正当化すると同時に、無意識を解釈学的意識によって相対化することに存する。「実在論的概念の可能な唯一の批判は、認識論的批判——カントの〈超越論的演繹〉という意味で——実在論的概念を〈演繹する〉批判である」(D.I., 419)。

(一)メタ心理学は、「現実解読の可能性の条件」(C.I., 105)として発見的価値をもつ局所論によって解釈の場を決定している限りで、任意の構築ではない。(二)分析は、終りある限りで、あのではなくこの言語連鎖の事実上の存在に達する。(三)分析は、あのではなくこの言語連鎖を選択する限りで、分析と言語連鎖との無限の結合を制限するよ

うな類型的實在を前提とするが、同時にその分析はこの言語連鎖の選択によってその類型的實在を検証するに至る。(四)経済論的モデルは無意識に機械論的性格を課すとしても、その機械論はそのモデルの発見的価値によって十分基礎づけられている。⁽⁴⁾この四つの意味でリクールは、経済論的モデルに裏打ちされた局所論の課す無意識の實在論を、それが終りある分析の相関者であり、無意識をなす表象の實在論として「認識可能な實在の實在論」(ibid.)である限りで、カント的な経験的實在論として捉えるのである。「精神分析の経験的實在論が正しく意味するのは、無意識は認識可能であり、そしてその〈表象代理〉の中でのみそうであるということである」(C.I., 106)。カントが自然科学的認識のために経験的實在論と超越論的観念論を合体させたと同様、リクールは精神分析的認識のために、無意識の経験的實在性が認識論の意味で解釈の操作に相対的であることを示そうとするのである。この相対性は三つのカッコ入れ *mise en suspens* に基づいた二段階からなる。

(一)無意識は、例えば派生物から起源へと遡行することを可能にするような解読の諸規則に相対的である(客観的相対性)。この相対性は、分折者も被分析者も含めて無意識をもつ意識に、その無意識の實在性を関係づけることをカッコに入れることで成立する。この意味でこの相対性は、心理主義の意味での解釈者の投射ではなく、無意識が認識論の意味で解釈学によって構成されることを意味する。(二)無意識は解読の諸規則を施行する分析者の意識に相対的である(相互主観的相対性)。この相対性は自分のものとして無意識をもつ被分析者の意識にその無意識の實在性を関係づけることをカッコに入れることから成立する。被分析者の無意識は彼の意識によって独力で構成されるのではなく、症候という能記として顕現することで、証人意識たる他者としての分析者の意識によって構成されるのである。確かにこの無意識が被分析者の無意識であると言い得るには、意識的になることの問題性を含む治療関

係 relation thérapeutique が究極的に必要であるが、しかしそれにはまず抽象的とは言えその関係をカッコに入れて、診断関係 relation de diagnostic の中でその無意識が他者としての分析者の意識によって認識論的意味で構成される必要がある。(三)無意識は治療関係の中で分析者と被分析者間に不可欠的に生じる転移中の言語に相対的である(主観的相対性)。この相対性は治療関係に予測不可能な出来事を導入する、分析者の独自の性格と被分析者の出会いに無意識の実在性を関係づけることをカッコに入れることから成立する。被分析者の反復強迫を制御しそれを想起の動機へと変えるための手段、従って病気から実生活への移行がなされる媒介領域として定義される転移は、分析者がそれを誘発し、蒙り、方向づけ得る限りで、学習可能であるから、無意識はその転移中の言語によって構成され得るのである。リクールは、フロイト読解の地平における意識性への無意識の相対性とは異なるこの三重の意味をもつ「新しい種類の相対性」(D.I., 418)つまり解釈の火床としての超越論的主観性—解釈学的意識への無意識の相対性によって、無意識をその意識によって認識論的に構成された解釈学的構成物と捉え、その実在性を診断された diagnostique 実在性と捉え直すことで、経験的実在論に超越論的観念論を合体するのである。「従って我々は次のように要約する。つまりエス(表象代理)としてのエス—筆者注)の実在性と意味の理念性である。エスが解釈者に思惟するものを与える限りでエスの実在性。意味が分析の終りにのみあり、分析経験の中でそして転移の言語によって作成される限りで意味の理念性。」(D.I., 425)。

四 主体の始源論—超越論的主観性の抽象性

〈力の言説〉をなす局所論的経済論的モデルは解釈学的意識による構成の場の外では意味をもたない (ibid.) 以

上、そのモデルが〈意味の言説〉内に統合されることで、〈力の言説〉は〈意味の言説〉に存立基盤をもつのである。エスが自らを表象として解釈者に与え、解釈者がその表象を言語化し得る限りで、エスの実在性は意味の理性性によって徐々に侵食され置換されると言い得るだろう。しかしリクールは解釈学的意識の構成作用における〈意味〉への〈力〉のこの還元可能性を通して、〈力の言説〉を空洞化して終るわけではない。その還元可能性は無意識的衝動を〈表象代理〉に限定して成立していることに注意せねばならないし、またそこから無意識的解釈学的意識への相対性が三重のカッコ入れを前提とし、その実在性は認識論的意味しかもたぬ診断された実在性でしかなく、治療関係に対して抽象的なレベルに留まっている (D.I., 424) ことに注意せねばならない。具体的な治療関係における無意識的衝動の実在性、つまり解釈学的意識へのその衝動の還元不可能性の行程を辿ろう。これは治療方法としての「精神分析にとつては表象の運命より重要な」(D.I., 145) また経済論を観点やモデルとしてではなく「諸物と、その中に含まれている人間についての見方全体」(D.I., 426) としてその存在論的意味を問うことで〈主体の始源論〉へと道を開く〈情動〉の問題性から始まる。認識論的レベルでの診断された実在性としての無意識的衝動の経験的実在性を、実存的レベルでの治療関係中のその存在論的実在性に深化するのが〈情動〉の問題性なのである。

「…我々は衝動代表の名で、衝動から由来し心的エネルギー(リビドー、興味)の或る一定量を備給された表象あるいは表象群を意味する」(D.I., 146) この衝動代表の量的要素は心的指標のもう一つの要素であり、〈情動量 charge en affect〉と呼ばれる。〈情動量〉は〈表象代理〉を核とする無意識系の表象群から切り離されても、〈その量に比例した表現〉の中で我々に感じられる。その〈表現〉が〈情動〉であり、従って〈情動量〉の変化は〈情動〉

の変化となる。確かに記述的観点からすれば〈無意識的情動〉という概念には問題がある。つまり〈情動〉は表象によって指示されるのが常であり、表象の取り違えによってこそ〈無意識的情動〉と言い得るのであって、〈情動〉は感じられ意識されているのである。しかし抑圧理論は〈無意識的情動〉概念を要求する。抑圧が不快を回避する機制であり、そこでは〈情動量〉の放出は表象の認知よりも重大で、この放出が抑圧過程の成功や不成功についての分析医の判断を決定するとすれば、〈無意識的情動〉概念は無意識系の表象群から分離された〈情動量〉の放出として、「無意識から直接発する情動」(D.I., 148)として正当化されるのである。ここで抑圧理論は〈情動〉の経済論の重要性を明確にする。抑圧理論は局所論と経済論を含んでいるが、その中では、〈情動量〉の放出を逆備給や備給の撤収等の備給状態の変化として詳述する経済論が、表象関係を設立する局所論より優位に立つに至る。〈無意識的情動〉の経済論では、「無意識の核はその備給を放出しようとする衝動代表から、従ってまた願望興奮から形成されており」(D.I., 150)「無意識は本来上時間と関係をもたないから無時間的であり、無意識過程の流れはその力と、快—不快による統制の要求とに従い、従って意識的になることは「単なる知覚行為に還元されず」(D.I., 151)「過備給という特殊な備給状態として経済論的に規定される。⁽⁵⁾

このフロイト読解を地平にしてリクールは、その〈情動量〉を「情動の中に代表され表象の中に移行しないもの、それは欲望としての欲望である」(D.I., 152)と捉え直し、〈表象代理〉の領域を扱う局所論に対する〈情動〉の経済論の優位性から、〈情動量＝欲望としての欲望〉を扱う〈情動〉理論は、解釈学と経済論との絆を可能な限り弛め(D.I., 153)「それによって「力の言語は意味の言説によって決して乗り越えられない」(D.I., 151)ことを示すと捉え直す。〈表象代理〉の領域では〈力(の言説)〉は局所論と経済論的観点を介して〈意味(の言説)〉に包摂可能で

あつたが、〈情動〉の領域では〈情動量—欲望としての欲望〉が〈表象代理〉を核とする無意識系の表象群に移行しない限りで〈力〉は〈意味〉に還元不可能なのであれば、その経済論としての〈力の言説〉は〈意味の言説〉に還元できない独自の存立構造をもつのである。こうして〈情動〉理論は経済論としての〈力の言説〉に自律可能性を提供する (D.I., 149) わけであるが、しかしそこからリクルールは〈力〉の自律可能性を結論するわけではない。確かに表象群から分離されることで〈情動量〉は「自己展開することが許されない萌芽」(D.I., 148)として以外には知られず、「せいぜい我々は、我々がそれについて多くを知らないこの情動の萌芽から、衝動の動きを経て、明瞭な情動に至るまでの或る種の行程に目印をつけ、或る種の展開に標柱を打つことができるだけである」(ibid.)が、しかし「この純粹な経済論的なものを表象可能なものと言表可能なものとの周辺で現実化することはできない。我々は欲望の名づけられないものを実体化することはできず」(D.I., 152)そうしてしまうと「経済論自体は精神分析に属すのをやめてしまふ」(ibid.)従つて「精神分析は決して裸の力ではなく意味を求める力に常に直面する」(D.I., 153)とリクルールは結論する。〈情動量〉としての〈力〉は表象に還元されることもできず、判明な実在として扱ふこともできないのであれば、そうした無意識的衝動については、「意味を求める力」、「言語の手前に登録される意味能力」(D.I., 384)「言語の方へ押しやられる」(D.I., 439)と述定するしかないのである。〈力の言説〉の自律可能性の基盤であるこうした〈力〉と〈意味〉の關係領域、リクルールはこの領域の内に〈我思惟す〉に対する〈我有り〉の先行性を読み取り、精神分析を〈主体の始源論〉と称するに至るのである。〈我思惟す〉に先行する〈我有り〉の存在論としての精神分析は、認識することが欲望としての実存の中に根ざしており、そこから生の乗り越え難さばかりか、「欲望と志向性の干渉」(D.I., 442)をも露にする。またこの点で精神分析はこの欲望のカッコ入れによって成立す

る認識論とその火床である超越論的主観性としての解釈学的意識の抽象性をも露にするのである (ibid.)。しかし〈力〉とその〈言説〉の関係構造、あるいは〈力〉と〈意味〉の干渉構造を短絡的に「意味作用に変換するエネルギー」(D.I., 384)と捉える精神分析に対してリクールは以下のように裁断する。「従ってこの領域では何ものも確定されていず、恐らく場合によってはフロイトの図式とは非常に異なるエネルギー論的図式(=エネルギー論的隠喩や資本主義的経済論的隠喩 D.I., 439——筆者注)の助けによつて、全部やり直されねばならないだろう」(D.I., 384)。治療関係のレベルで〈力〉から〈意味〉へと論じる〈主体の始源論〉としての精神分析は、ここで逆に、しかし同レベルで意識的になることの問題性を〈意味〉から〈力〉へと論じる——言語で治療する talk cure のであれば——〈主体の目的論 téléologie du sujet〉と対にされる必要がある。しかしこの領域を含んだ〈力〉と〈意味〉の新しい関係構造は拙論では論じ得ない。

注

- (1) Paul Ricoeur, *Le conflit des interprétations*. (Seuil), 1969, p. 20. (以下 C.I. と略記) また Paul Ricoeur, *De l'interprétation - essai sur Freud*. (Seuil), 1965 は以下 D.I. と略記。リクールの諸論文を英訳して集めた Charles E. Reagan, David Stewart, *The philosophy of Paul Ricoeur* (Beacon Press), 1978 は以下 P.P. と略記す。
- (2) リクールは実存論的段階に、フロイトの精神分析からの主体の始源論と、ヘーゲルの精神現象学からの主体の目的論 (téléologie du sujet) と、エリアーデ等の宗教現象学からの終末論 (eschatologie) を認める。この三つの存在論を象徴表現=解釈の領域で調停することがリクールの壮大な企てである。象徴表現については、その退行的性格を説明する精神分析(昇華の問題性を留保すれば)は、「抑圧された衝動以外に象徴的なものの源泉は存在しないということ、このことを証明する手段をもたない」(D.I., 485) のであれば、「生きた隠喩のもつ性格、つまり解釈において「象徴が自己自身の起源を否認し乗り越える能力」(ibid.) という象徴表現の前進的性格を否定し得ないということだけ指摘しておく。

(3) P.P.中の論文“The Question of Proof in Freud's Writings”参照。

- (4) これはラカン批判である。リクールは、精神分析の行動主義的再定式化への批判という点でラカンに賛同するが、彼に無意識の言語学的定式化のためにその経済論を排除する考え方を見、彼を批判する (D.I., 388)。その言語学的定式化の利点は無意識の経済論が物化されるのを防ぐだけであり、その定式化は経済論に裏打ちされてこそ理解可能なのであるゆえ、その経済論を言語学的定式化に還元することはできないのである (D.I., 385)。この点ではラプランシュやルクレールも同様であつて、確かに彼らの有名な定式 $S_1 - s$ — $S - S$ 中の分母 $S - S$ は、同じ表記が能記でもあり所記でもある点で、ラカンとは異なり無意識の非言語的性格を意味するが、しかし同時にそれによつて無意識の言語学的定式化の限界が示されるとリクールは捉える (D.I., 392)。
- (5) リクールはここに精神分析と現象学の相違を見ている (D.I., 400)。